

「実践研究」

## 小学校以降の学びを見通した幼児の学びの探求 ～ICTなどを活用した観察記録・分析の工夫・改善を中心に～

原田 和幸<sup>※1</sup>・松野 絵理<sup>※1</sup>・高木 留美子<sup>※1</sup>  
稲吉 幸恵<sup>※1</sup>・宮地 哲史<sup>※1</sup>・近藤 眞紀<sup>※1</sup>・朝長 久美子<sup>※1</sup>  
井口 均<sup>※2</sup>・小西 祐馬<sup>※2</sup>

※1 附属幼稚園 ※2 教育学部

### 1 はじめに

2005年に発表された中教審答申の中に今後の幼児教育のあり方として「幼児の生活の連続性及び発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実」とある。この答申が「学びの重要性」「発達の連続性」を強調していることがうかがえる。この「学び」「発達の連続性」という言葉を学力向上の視点を重視し、小学校や中学校との一貫性をもたせるという意味で捉えると、『幼児教育は就学に向けての準備としての教育』と位置付けてしまう危険性がある。しかし、2001年のOECD報告書には、『幼児期は人生最初のステップとして極めて重要な意義をもつ』『それ自体が重要な意味をもつ人生最大の段階である』とある。これまで明らかにされてきたように、幼児期の生活の主たる活動は遊びである。その実体験の中で子どもは様々なことを学ぶ。そうした保育観の基に、子どもの遊びを中心とした生活を充実させていくことが幼児教育の最も重要な課題であり、その結果として、小学校以降の学びに必要な諸力を身に付けることで子どもの未来につながると考える。また、文科省が行った全国学力調査やOECDの学力テストの結果から『日本の子どもたちの知識面は満足 of いくものとする反面、思考力や表現力、その活用能力においては劣っている。また、学習意欲についても低い。』ということが明らかになっている。知識自体は様々な方法で教え込むことができる。しかし、問題はその得られた知識や技能が自分のめあてや目標を実現させるために活かされるかである。そうでなければ、せっかく身に付けた知識や技能も子ども自身が判断力、表現力、創造力を発揮する手段として活かされず、生きる力もやせ細ったものとなるのではないかと本研究ではとらえている。自分のめあてがあり、それを達成するために判断する力・表現する力・創造する力が発揮されてこそ、生きる力が育つものと考えられる。

私たちは、幼児期における学びとはいったい何なのかについて協議し、『生涯にわたる学習能力の基礎を培うこと』と捉えた。学習能力の基礎とは、遊びを中心とした保育の中で、子どもたちが一人遊びに夢中になったり、友達や保育者とかかわる遊びに没頭したりする中で、問題やトラブルに直面することで解決に向けた試行錯誤がなされ、伝え合うことの大切さや相手の立場に立って考えたり

行動したりすることの大切さなどを学んでいくことと考えている。そのためには幼児期にふさわしい一人一人の関心・意欲・自発性を高めていくことの必要性を改めて感じている。

だからこそ、子どもの関心・意欲・自発性が発揮され、何に対して、どのようなことをしようとしている姿かを遊びの観察記録によって明らかにし、その子どもが自らやろうとしていること、それがその子自身にとって、また仲間関係にとってどのような意味をもつかなどを様々な視点から検討し、保育の手立てを工夫していく必要があると考えた。

そこで本園では「子どもの関心・意欲・自発性が、具体的に発揮されている姿に注目。」「その活動の中に幼児期の大切な学びがある。」と考え、

- ・子どもが自ら取り組んでいる遊びを主対象に、ニュージーランドの幼児教育プログラム、テ・ファリキで用いられた「5つの視点」で読み取る。
- ・その子どもの活動場面をデジタルカメラやビデオで記録を撮る。
- ・記録された子どもの学びの姿をICTなどを活用した保育カンファレンスを通じて分析する。

ことにした。

そこで、昨年度のテーマを継続し、今年度の研究テーマを

「小学校以降の学びを見通した幼児の学びの探求  
～ICTなどを活用した観察記録・分析の工夫・改善を中心に～」

とし、研究を継続している。

## 2 研究1年次、2年次の成果と課題

研究1年次は、遊ぶ姿の中にある子どもの学びを読み取るための観察の視点として、テ・ファリキで用いられた記録と評価の「5つの視点」を基に、自ら取り組もうとしている活動に注目した。その際、その子の学びの姿をその子の立場にできるだけ立ち、読み取ろうとしてきた。その結果として、一人一人がもっている「よさ」に改めて気付かされたように思う。

観察の視点は次の5つである。

『幼児の関心や興味』

『熱中する姿』

『直面している困難に立ち向かう姿』

『自分の考えや気持ちを表現する姿』

『他児または他者の立場から物事を見ようとする姿』

また、長崎大学教育学部の教員2名（井口、小西）を交えての保育カンファレンスも行った。

研究2年次は、遊びの展開過程に含まれる子どもの学びを読み取るために、ICTや子どもの動線記録などを活用するようにした。今まで見落としていた子どもの目線や体の動きなどが可視化できるようになった。さらに、学びの連続性の

考察のため、卒園児の小学校での学習の様子を観察した。2年次の研究の終わりには、今後も幼稚園と小学校での子どもの観察を継続していけば、幼児期の遊びでの学びの力と小学校での学習活動との繋がり（連続性）が見えてくるのではないかと考えた。3年次に向けての課題としては、「学びの物語検討の継続・蓄積を図り、保育の改善に繋げる。」「幼小の学びの連続性について、観察記録を蓄積する。」の2点が挙げられた。そこで今年度は、

- ・観察記録の継続・蓄積
  - ・保育カンファレンスの工夫改善
  - ・幼児期と児童期の学びの連続性の検証
- と、この3点について取り組むこととした。

### 3 附属幼稚園における今年度の取組

#### (1) 観察記録の継続・蓄積

研究1年次から、子ども（抽出児）を「5つの視点」で観察し、年度の終わりには記録を「学びの物語」としてまとめている。また、学びの連続性を検証するために、卒園後も観察を継続している。研究3年次の今年度は、観察の継続が2年間のA男、3年間のB男、年長児から小学1年生のI男と、3名の子どもについて観察記録を継続・蓄積してきた。観察記録を事例としてまとめ、保育カンファレンスを通して子ども理解を深め、次の保育の手立てへと繋げていった。保育カンファレンスについては、次の(2)において詳しく述べたい。

#### (2) 保育カンファレンスの工夫・改善

##### ①カンファレンスシートを用いて

本園では、環境構成の工夫や教師の援助のあり方を考え保育の改善を図ることを目的として、構成メンバーの違いによる3種類の保育カンファレンスを行っている。その3種類とは、職員による保育カンファレンス、教育学部教員を交えた保育カンファレンス、幼稚園と小学校の教職員で行う幼小合同カンファレンスである。また日々の情報交換や保育計画の時間にも子どもの様子について話し合っている。

##### 【保育カンファレンス】

本園職員で行う保育カンファレンスのことであり、情報交換会や保育計画なども含む。その際には、付箋紙に「5つの視点」で客観性を踏まえつつ、自分なりに解釈・意味づけた子どもの姿を記入し、カンファレンスシートに貼り、進行役を中心に子どもの遊びの分析・考察を行い、保育の改善・充実に向けた手立てについて意見交換を行う。

また、保育カンファレンスの際には、各期の事例をICTなどを活用しながら検討していく。

### 【教育学部教員を交えた保育カンファレンス】

学部教員を交えて、事例や保育カンファレンスで問題になった子どもの姿について、専門的な立場からの示唆を得ながら、子ども理解を深め、保育の改善・充実に繋げていく。

### 【幼稚園と小学校の合同カンファレンス】

卒園児について、幼稚園時代の学びの姿と小学校での学びの姿について相互に理解し合い、学びの連続性について分析し、保育の改善・充実に繋げていく。

昨年度までも職員同士または学部教員を交えての保育カンファレンスを行ってきたが、今年度は次の2点を踏まえて保育カンファレンスを改善していった。

○子どもを観察する際、より客観的な事実を記録するようにし、その事実をもとにそれぞれが解釈し意味づけ、読み取る。

○子どもの学びを可視化してまとめ、短期の振り返りや保育の改善について意見交換を行う。

そこで、今年度の保育カンファレンスでは、客観的な観察方法として、昨年度まで取り入れていた、子どもの発言、行動の記録、子どもの動きを動線に表した記録、デジタルカメラやビデオカメラなどのICTを活用した記録などをもとにした分析方法に加え、新たにカンファレンスシートを用いることにした。このシートに子どもの観察時の様子を記入した付箋紙を貼り、「5つの視点」に沿って子どもの遊びに読み取れる学びの具体的内容を分析していくことにした。次に示すのは、りす組で行った保育カンファレンスのシートの内容をまとめたものである。

「5つの視点」	記入のポイント	付箋紙
関心は何に！	話題、活動、役割、仲間、現象、事物など、何に関心を向けているか記入する。	<ul style="list-style-type: none"><li>・プリキュアのハートやリボン、ひらひらのついたステッキを手にとって、手や足を大きく動かして曲の間中踊り続ける。</li><li>・プリキュアになりきる。</li></ul>
熱中してる！	何に一定の時間をかけて、注意を持続させ、心地よさを感じているのか。	<ul style="list-style-type: none"><li>・プリキュア遊び（40分）作る→踊るを繰り返していた。</li><li>・制作遊びのテーブル、ごっこ遊びの場所、自分のロッカーの場所を繰り返し動いていた。</li><li>・作ったステッキを大事にロッカーに片付け、踊りに使うステッキとの使い分けをしていた。</li><li>・プリキュアを踊る場所に15分～20分滞在していた。</li></ul>
困難に立ち向かう！	何に困難さを感じ、問題解決のために工夫を凝らしているのか記入する。	<ul style="list-style-type: none"><li>・床に置いていた自分のステッキを踏まれそうになると、「踏まないで！」と言葉で伝えた。</li><li>・予め作っておいたステッキにリボンとハートを付けたいが、付かない。じっと見て別のステッキに替えて付ける。</li></ul>

<p>自分の考えや気持ちを様々な方法で表現する！</p>	<p>言葉、動作、音楽、造形、文字、数、話などで自分を表現している姿について記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プリキュアの曲が途中から流れると「はじめからしてくれない？」「いちばんはじめから。」と言っていた。</li> <li>・ヒーローごっこを見ている時、「〇〇くん、がんばれ！」と応援する。（自分もその前に応援してもらっていた。）</li> <li>・制作を通して、自分の思いをいろいろな形で表すことができる。完成度も高い。</li> </ul>
<p>他の人（児）の立場から物事を見ようとする！</p>	<p>他の人（児）との話や想像上の出来事で、公平さや助け合い、クラス全体の生活を守る、誇りある態度などの姿について記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プリキュアを踊る順番を守っていた。踊りを楽しみながら、友達に合わせて踊っていた。自分の順番がくるまで、友達を応援していた。</li> </ul>
<p><u>短期の振り返り</u> 自分の作りたい物や遊びたいことに対して、イメージしていることがはっきりしていて、そのイメージに近付くことができる器用さがある。友達とのかかわりに興味があり周囲のことをよく見ている。</p>	<p><u>次に繋がること／次にどうしたいか</u> 自分の遊びのイメージがはっきりしているので、より積極的に自分から新しいことに挑戦できるように、まだ踊ったことのない曲を準備しておいたり、友達とかかわりながら遊びが発展するように、制作遊びの材料を充実させたりしていきたい。また、逆に、あえて材料を減らしておき、困難を感じる場面に直面させ、泣いたり、思い通りにならなくて悔しがったりする経験を積み、年中組の間に様々な感情を出し切らせるのも、今後の手立てとして考えられる。そのような環境構成もしていきたい。</p>	

このようなシートを用いて、保育カンファレンスを行っていったが、前述した2点の改善点をより具体化するために、さらに以下のような4点について共通理解を図り、観察記録、保育カンファレンスを行った。

- 子どもの学びを可視化するためには、付箋紙に子どもの姿を客観的にありのまま記入する。付箋紙には回数や時間、場所、個数、道具、言葉など客観的事実を記入する。
- 客観的事実をもとに子どもの学びを分析する。肝心なことは、その事実をどう多様な見方で解釈・意味づけられるか、子どもの遊びの背景にあるものも分析し、子ども理解を深める。
- 分析メモの欄を設け、カンファレンスの内容をその場で記録していき、次の保育改善の手立てを考察する。
- 保育カンファレンスの手順を整理した進行表を作成し、効率よく話し合いを進める。

以上のような共通理解を図ることで、客観的な事実を基に、保育者・観察者の多様な見方で子どもの心を読み取っていった。また、子どもの学びを可視化してまとめ、短期の振り返りや保育の改善についても保育カンファレンスの中で行っていった。次に示すのは上記4点の共通理解後のうさぎ組のカンファレンスシートである。

改善後のカンファレンスシート

「5つの視点」	記入のポイント	付箋紙	分析メモ
<p>関心は何に！</p>	<p>話題，活動，役割，仲間，現象，事物など，何に関心を向けているか，<u>客観的事実を記入する。</u></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気の合う特定の友達（C子）と一緒にいたい。<u>大半の時間を二人で過ごしていた。</u></li> <li>・長い時間，夏祭りのアイスをたくさん作ったり，お店のポスターを描いたりしていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気の合う友達と一緒に作ることに関心があった。自分が作った物を大切にロッカーにしまっていた。関心があるからこそ，大切にしている。</li> </ul>
<p>熱中してる！</p>	<p>時間，個数，種類，場所，色などを客観的に付箋紙に記入している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>30分弱の間，16個のアイス</u>を折り紙で作らあげた。</li> <li>・作り終わるまで，<u>制作棚とテーブルの往復</u>。他の場所へは行こうとしなかった。</li> <li>・制作時，C子にいろいろな指示を出していた。</li> <li>・<u>紫やピンクを好み</u>，きれいな物を作ろうとしていた。</li> <li>・絵も上手に描いていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アイスを作りあげてをゴールにして集中していた。美しいもの，色彩豊かなものを好んでいた。熱中の先に，イメージしたもの，ゴールしたものがあるのかもしれない。</li> </ul>
<p>困難に立ち向かう！</p>	<p>何に困難さを感じ，問題解決のために工夫を凝らしているのか，<u>客観的事実を記入する。</u></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・よりよいものを作ろうとしていた。</li> <li>・ポスターに折り紙を貼ったり，字を書いたり，絵を加えたりしていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夏祭りを目標に，よりよいものを作ろうとしていた。感性がいい方向に出ている。</li> </ul>
<p>自分の考えや気持ちを様々な方法で表現する！</p>	<p>言葉，動作，音楽，造形，文字，数，話などで自分を表現している姿について，<u>客観的事実を記入する。</u></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の思いを言葉ではっきりと伝えることができていた。教師には「<u>〇〇したいです。</u>」という話し方ができていた。</li> <li>・C子に対しては，穏やかに話していた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の思いを言葉で伝えることができるが，相手によって伝え方を変えているのかもしれない。どんな言葉でどう伝えたらいいかが身に付いている。</li> </ul>
<p>他の人（児）の立場から物事を見ようとする！</p>	<p>他の人（児）との話や想像上の出来事出で，公平さ，助け合い，クラス全体の生活を守る，誇りある態度などの姿について，<u>客観的事実を記入する。</u></p>	<p>カンファレンスで出した意見をまとめている。短期の振り返りと今後の考察に繋がる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・熱中しつつも，周囲のいろんなことにアンテナをはっていた。穏やかに周りをみていた。相手のことを思って，「～してあげる」という言葉がよく出ていた。</li> </ul>

<p><u>短期の振り返り</u></p> <p>「心の安定」（ここでは、A子と一緒にいること）があることで、好きなことに熱中することができた。周囲のこともよく見て、相手のこともよく考えて行動していた。</p> <p>この子どもの学びはどのような姿にあったか。</p>	<p><u>次に繋がること／次にどうしたいか</u></p> <p>制作に関心が高いので、今まで使ったことのない年長ならではの活動や材料を準備していく。B子のよさを周囲の子どもも感じ始めているので、よさが発揮されみんなに認められるような環境構成を考えていく。</p> <p>よさが発揮されるような今後の環境構成を考察する。</p>
--	---

## ②学部教員を交えての保育カンファレンス

昨年度までのカンファレンスの中で、「子どもの行動には意味がある。」「子どもは有能な学び手」という見方で観察すると、結果として肯定的に子どもの行動が捉えられるようになり、子どものよさが見えてくるという手応えを得ていた。今年度さらに、子どもの行動の背景にある心を読み取り、子ども理解と保育の改善に繋がるように、学部教員を交えての保育カンファレンスを継続してきた。

### (i) 年中児A男の保育カンファレンス

事例A 「解除！」 6月13日

A男はG男、J男、H男、E子などとヒーローごっこをしている。ヒーローになりきって曲に合わせてたたかっている。しばらくすると、J男の顔に引っかけ傷があったりE子が泣いていた。それぞれに理由を尋ねると、「A男の武器が当たった。」と答えた。そこで、保育者はA男のところへ行き、そのことを伝える。

T 「A男君、その武器が長すぎて人に当たっているみたい。」

A男「う～ん、じゃあ切る。」

T 「えっ！切るの？切らなくてもいいよ。」

しかし、A男はピューっと保育室へ行き、自分が作っていた武器の先端を10cmほど切る。

A男「解除！」

T 「なるほど、解除ってかっこいいね。」

A男「解除！」

また外へ出て、ヒーローごっこを続けた。

### 保育者の振り返り

のびのびと遊んでいるA男に武器のことを伝えるのは、せっかく遊びを楽しんでいるA男の楽しい気持ちを阻害するのではないかと迷ったが、実際に泣いたり、傷が付いたりしている子どもがいたため、伝えることにした。結果的には

A男の楽しもうとする気持ちは続いたが、大切にしている武器（自分で作った）を切るきっかけをつくった保育者の働きかけはどうであったか、未だに悩んでいるところである。

自分の武器を切るときの、「解除！」という発想は、何ともA男らしいものであった。普段から遊びに関して次々に楽しいアイデアが出てくるA男であったため、自らしようと思ってした行動ではなかったが、そのことも遊びの延長上に位置づけ、楽しみ続けたのだろう。A男の「楽しもう！」「遊ぼう！」とする強い気持ちに救われた思いがした。（5観点でいうと『他児または他者の立場から物事を見ようとする姿』）

#### **保育カンファレンス**（学部教員を交えて）

- ・あれほど自分の思いを発揮して遊ぶA男の姿に感心せずにはいられない。「友達に武器を当ててしまった」という出来事も、「当ててしまった…」「友達が泣いてしまった。」「どうしたらいいかな。」など、A男なりに一生懸命考える機会となっていると捉えると、一見否定的に見える姿にもA男の学びがあると考えられるのではないだろうか。
- ・自分の思うように遊びたい、友達と一緒に遊びたいという思いをもちながらも保育者の目（評価）が気になっているのかもしれない。保育者の言動からその心を読み取って、一つ一つの場面で、自分のしたいことより保育者の評価を優先していたのだろうか。そのため、A男にとってトラブルを解決していく過程には多くの場合我慢がついてくるのかもしれない。
- ・保育者の問いかけに対して、すぐに「切る」という方法を選択したA男の姿から、自分の思いを抑えて、保育者の思いを感じとっていることがうかがえる。物事を「良い」「悪い」の対極的に捉える傾向の強いA男は、保育者の問いかけを受けて、これは「悪い」と捉えてしまったのかもしれない。そうではないことを伝えていく必要性を感じる。

#### **次にどうしたいのか・どうすればよいのか**

- ・友達と一緒に遊びたいという思いを受け止め、具体的な遊びに繋げていけるように仲介する。
- ・良いこと、悪いことで「我慢」を求めるのではなく、A男の気持ちを認め、より楽しめる方向でかかわり方や活動内容を導く保育者の対応も必要なのではないか。
- ・「良い」「悪い」という対極的な世界だけでなく、「中間」の世界を知らせていく。

#### **学部教員を交えてのカンファレンスより（まとめ）**

○保育者が得た新たな視点、これからの保育について

- ・ありのままを認めるということ

動作は見えるが、それだけで判断するのではなく、そこにあるA男の本当の思いを読み取り、保育者が客観的事実を多様に意味付けしていくことが大切である。肯定的に見える姿だけでなく、一見否定的に見える姿にもA男の学びがあると考え、具体的にどういう動作の中に、どのような形で表れているのかを見取っていく。

- ・中間の世界を知らせていくこと

物事を対極的（「良い」「悪い」）に判断する傾向が強いA男。それは、今までの経験に基づくもので、A男がその時々自分の行動を真剣に振り返ってきたからであろう。しかし、それがA男にとって「我慢」や「緊張」を感じるストレスフルな環境となっていることも事実であろう。だからこそ保育者はそれだけではない「中間の世界」（「良い」「悪い」では判断できないことがある）と一緒に経験することを通して伝えていく必要があると考える。つまり、遊びはズルしたり、叩いたり、キックがあつたりしても、それらがある程度許容し合うことで、遊びはより楽しくなることを知らせていくことなど。

- ・人とつながる上で大事なことをどのようにして生み出しているのか

ある事象を通して人とのかかわりについて考える機会も大切だが、そういう場合、A男は周りの期待を過剰に受け取ることがあり、相手の立場に立つという点では立ちすぎるくらいである。相手の立場に立って気持ちを知っていくことも必要だが、時には、「自分が楽しくてつい夢中になった姿」に共感してくれる仲間の発見から、人とのかかわりについてのA男の学びを引き出していくことも必要であろう。そのため、友達とイメージを共有し、協同して遊んでいく過程を多様な形で経験できるような環境を準備したり、意図的に機会を設けたりしていくようにする。

#### ○カンファレンスを終えて

カンファレンスを行うまでは、保育者はA男の言動の表面的な部分を見ていたように思う。そのため、「我慢したことを認める」ことが多くなっていた。しかし、それではA男の本心は見えてこないと感じた。もっと日常の中でA男が楽しさを実感している場面に目を向けたい。そして、A男が生き生きと遊ぶ過程のどこにA男の学びが表れているのかについて見取っていきたく強く思った。

### （ii）年長児B男の保育カンファレンス

事例B-1 「いろいろなお店があった方がみんなが楽しいでしょう」6月24日

夏祭りの準備をしていたが、子どもたちがそれぞれにお店の準備をしていて誰が何をしているのかわからないでいた。そこで、きりん組会議を開き、どんなお店を開くのか改めて話し合った。

すると、B男が

B男「先生、ここにお店の名前を書いて。」

T 「どうして？」

B男「だって、どんなお店があるかわからないから。書いた方がわかるでしょ。」

T 「そうだね。お店の名前を書くのね。わかった。」

A子「そして、お店をする人の名前もね。」

T 「みんなの名前？」

H男「あのさ、みんなの名前を書いたらさ、だれが何をしてるかってわかるたい。」

T 「先生が書いていいの？」

B男「先生、これを使っていいですか？」

と言って、ホワイトボードに貼ってあるネームプレートをはずす。

きりん組のみんなが自分がしているお店にネームプレートを貼り付けた。

すると、B男が大きな声で、

B男「お隣のクラスの人たちにも言ってきます。」と言う。

夏祭りを一緒にしようと呼ぶというのだ。他の子どもたちも「お隣のクラスの友達とも一緒にする。」「年長と一緒に夏祭りしよう。」と言い始める。会議が終わった後、B男に保育者がたずねた。

T 「ねえ、B男君。どうして言ってきますって言ったの？」

B男「だって、いろいろなお店があった方がみんな楽しいでしょう。りす組さんとかぞう組さんとかね。あっ、くま組さんもです。」

と言った。

#### 保育者の振り返り

話し合いの中でも自分の思いをどんどん言葉で表現するB男。アイデアも豊富で遊びを楽しんでいる。この事例では、年長組みんなで一緒に遊びたいという彼の思いが言葉として表れていたことや、何より夏祭りをして年中児や年少児とも遊ぶということを想定しながらの意見を述べるB男の成長を感じ、驚いた。たくさんのお店があった方が来る人が楽しいだろうとお客さん（年中児・年少児）の立場になって考えている姿も見せていた。（5観点でいうと『他児または他者の立場から物事を見ようとする姿』）

#### 次にどうしたいのか・どうすればよいのか

- ・相手の立場に立った意見や考えをB男が出した時には、大いに認めるようにする。
- ・相手の立場になって考えることができるようになった姿を継続して観察する。特に年中児、年少児に対する言葉かけや接し方を注意深く観察する。

**保育カンファレンス**（学部教員を交えた保育カンファレンス）

＜井口教員より＞

- ・この事例を通してB男のリーダー性を感じる。リーダーとして育てていくとよい。

B男はアイデアマン。みんなのことを結構見ている。みんなをまとめていく力がある。

最初は小グループでもよいのでグループのリーダーにしてみてもどうか。

- ・リーダーとはどういう役目なのかということからB男に感じさせていく。

目的意識をもってみんなの役に立つようにさせる。

保育者のサポートが必要ではあるが、やりたいこと、おもしろいことを企画させる。

遊びの質が問われている今日だからこそ、持続性がありストーリー性、協力性のある遊びを企画させてみてどうか。

- ・車に興味をもっているので彼独自の世界を認めながら『車博士』と他の子どもたちに紹介するなど保育者が他の子どもたちとの間に入り、これまでの保育者とB男かかわりから友達とB男とのかかわりへと移行させる。

＜小西教員より＞

- ・困難にも立ち向かえるし、他者のことも考えられる。

この事例を見るとまさにリーダー的存在であることを感じる。

＜他教諭より＞

- ・3，4歳児の時は友達とのトラブルがあったようだが、現在はどうか。

→ほとんどない。

→ある意味、いままでに出し切ったのではないか。（井口教員）

＜担任より＞

- ・車を折り紙でつくる遊びに熱中している。ただ、平面である。ちらしの車にも興味がある。

あくまでも平面にこだわる姿が少々心配なところではある。

→おそらく、彼の頭の中で映像的に細かいところまではあるが自分で作ることができないとわかっているから平面に作っているのではないか。（井口教員）

→いつか本物のリアルなものに興味をもつ可能性はあるのか。（小西教員）

リアルに近づけば自分なりのオリジナリティーへと近づけようとする可能性があるかもしれない。

→モデルを示すのもよい。（井口教員）

今は、平面にこだわりをもっている。今はとにかくたくさん作りたいと思っているのでは。

**次にどうしたいのか・どうすればよいのか**（カンファレンスを終えて）

- ・友達とかかわる中でトラブルが多かったB男であるが、年長組になって少しずつ

つその姿が変わってきた。自分本位だったB男が友達のことを考えて発言する姿が見られるようになってきた。その姿を保育者が大いに認めるとともに、遊びの中で出される楽しいアイデアやイメージを共有し、友達に伝えることでB男が他の子どもたちとかかわることができるようにしていきたい。グループ活動でB男が活躍できる場を保育者が設定し、B男に友達とかかわる楽しさや自分のイメージを友達とともに形にする過程の楽しさを感じさせていきたい。また、彼の好きな『車』を媒体にしながら遊びが広がるような環境も整えていきたい。

#### 事例B-2 「僕は車が好きなんだ！」 9月20日

実習生の半日保育。絵の具を使った造形遊び。

きりん組の前にいろいろな場をつくっている。絵の具を泡立ててボードに絵を描く泡の絵コーナー（「あわあわ地獄」）、ペットボトルに絵の具を溶かして斜めにしたボードに流して遊ぶ流し絵コーナー（勇者の坂道）、絵の具を含ませたペーパーを板にぶつけて遊ぶ投げつけ絵遊びコーナー（恐竜草原）など子どもたちが遊んでみたいと思う場を実習生なりに考えていた。

汚れるのに少しだが抵抗がなくなってきたB男であったが、実習生は彼を観察し、彼が車や車輪や丸く動くものに興味関心があることを考慮して、流し絵コーナーでは箱で作った車に車輪をつけ、その車輪の表面には凹凸を付けていた。車を動かすとコロコロとスタンプが紙につく仕掛けだ。

登園したB男。支度をしながら外を見て跳びはねる。

B男「先生、今日は何の冒険ですか？見ているだけで楽しくなっちゃいます。」

T 「何でしょうね。今日はお勉強先生と一緒に遊びましょう。」

B男「わかりました。」

朝の支度を素早く済ませたB男。実習生A（以下 TA）、Bが見守っている。

すると、TAがB男に話しかけた。

TA「B男君、準備終わりましたか？」

B男「3つの約束ができました。お外に行って遊びます。」

そう言って実習生が準備した場に行き行って遊び出す。最初は、以前、似たような場で遊んだことのある投げつけ絵遊びコーナーへと行く。汚れるのも平気でどんどん遊ぶ。絵の具をしみこませたティッシュを障子紙に投げつけると恐竜の絵が浮き出てきた。

B男「おおーっ。何か出てきました！すごい！恐竜です！」

10分くらい遊んでいたが、次に隣の流し絵コーナーへと移動した。すると、B男が遊ぶだろうと予想し、準備していた車を発見する。

B男「僕の好きな車だ！見て！見て！僕の好きなフォルクスワーゲンがある。僕

は車が好きなんだ！」

そう言って、車を手に取り、何回も何回も車を転がして遊んだ。紙についてのタイヤの模様を見ながら喜ぶB男。

事例B-3 「トヨタ工場」

10月24日～30日

〈10月24日〉

秋まつりが終わった。子どもたちは、秋まつりの計画を話し合った時に出し物だけでなく、お店も開きたいと言っていた。そこで、そのことを子どもたちに投げかけると、「年長の秋まつりをしたい。」と言う。そこでどんな材料があるのか話し合った。子どもたちは、段ボール箱、空き箱、牛乳パック、モール、ビーズ、紙袋、紐などを準備してほしい、自分たちも家から持ってくるという。

〈10月25日〉

男児の何人かが段ボール箱を運んできて何を作るか相談している。その中にB男もいた。メンバーはB男、C男、D男、E男、F男である。

T 「何を作っているの？」

B男「トヨタ工場です。」

T 「えっ？トヨタ工場？」

B男「そうです。トヨタ工場です。車の部品や車を販売する工場です。」

T 「それはすごいねえ。」

E男「今、何を作ろうかって相談してる。」

T 「楽しみ！また後で教えてね。」

E男「わかった！」

そう言ってしばらく保育者はその場を離れ、見守ることにした。すると、使ってもいい紙が入っているかごから画用紙を取り出したB男、C男。何をするのかと見ていると鉛筆で車の部品を描いている。驚いたことに、いつもは自分から絵など描くことのないC男が絵を描いている。B男が描いているのを見て真似をしている。

B男「こうなって、こういくとエンジンが動く仕組み。あっ、C男君上手だねえ。すごい、すごい。」

C男「ありがとう。」

B男「僕はハイブリッド車を描いているんだけどC男君は？」

C男「うーん。考えながら描いてる。」

B男「わかった、考えながら描いて、後でわかるんだよね。」

C男「そういうこと。でも絵は苦手なんだよなあ。」

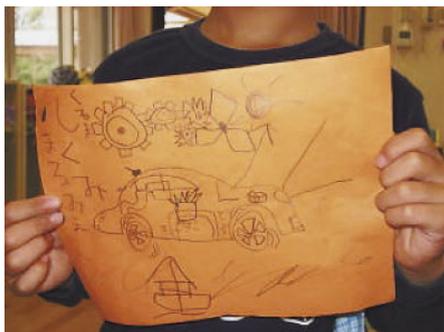
そう言いながら二人は1時間ほど絵を描いたり、他の子どもたちと相談をしたりしながら遊んでいた。保育者は出来上がりを見たいと思い、言葉をかけた。

T 「そろそろできましたか？」  
B男「設計図です。C男君と描いたんです。」  
T 「すごーい。」

保育者の声に他の子どもたちも寄ってきた。

A子「上手いねえ。」  
D子「すごい。」  
C男「設計図を描いてる。」  
T 「まだ途中なの？」  
C男「うん。途中。」  
B男「二人で描いてるんです。」  
T 「できたら見せてね。楽しみに待ってるよ。」  
C男「うん。」  
B男「ハイブリッド車だから時間がかかるんですよ。」

その後二人は保育者を呼んで、描いた絵を何枚か見せてくれた。トヨタ工場のメンバーはハンドルを作り、車を作ろうと相談していた。相談はB男が中心となって行われた。



**B男が描いたハイブリッド車の設計図**



**C男が描いた車の設計図**



**紙皿のハンドル**

保育者は、お店というと品物があってそれを売るものというイメージを思い浮かべていたため、この工場がどうなっていくのか興味をもったと当時に心配でもあった。今まで平面の車しか作らなかったB男。今度はどのようなイメージをもって遊んでいるのかと黙って見守ることにした。

すると、B男が保育者に話しかけてきた。

B男「先生、紙の皿を使っていいですか？」

T 「どうぞどうぞ。さっき、B男君達がハンドルを作っていたからもっと作るかなあと思ってたくさん準備しましたよ。ちょっと変わったお皿も増やしたので使ってみてください。」

様子を見ながら材料を増やした保育者。すると、

B男「これはいい！使いまーす。」

そう言ってB男は深型の皿と材料箱から探し出したガムテープの芯を手にとり何やら作り出した。しばらくして、

B男「じゃーん。車ができました！」

B男が幼稚園で立体の車を初めて作った瞬間だった。

F男「よくできてるね。僕もやってみよう。」

B男「いいよっ。一緒に作ろう。」

そう言って、一緒に作り始めた。今まで折り紙でしか車を作らなかったB男が立体の車を作った。

T 「ねえ、B男君。B男君の作った車、素敵ね。自分で考えたの？」

B男「そうですよ。家で作ったから幼稚園でも作ってみようって思って。幼稚園でも（車を）動かしたことがあるから思い出して作りました。」

①

T 「B男君が作ったっけ？」

B男「・・・。」

何も言わずに、作ることに集中し始めた。

〈10月28日〉

朝から登園すると保育者にすぐに話しかけるB男。

B男「今日もトヨタ工場をします。」

T 「そうですか。頑張ってるね。先生に手伝えることがあったら言ってくださいね。」

B男「ありがとうございます。今はありませんよ。」

などと言いながら笑顔である。朝の支度をすると年長会議を開くことになっていた。年長児それぞれがお店の準備をしていたが、誰が何のお店を開くのかはつきり決めようと先週の金曜日に年長組のみんなと約束していたのだ。年長会議でB男はトヨタ工場をしたいと言った。トヨタ工場のメンバーは今まで遊んでいたメンバーだった。

会議が終わると早速みんなと相談して、段ボールを使って車を作ろうとして



**B男の紙皿の車**

いたがなかなか進まない。そこで、秋まつりで使った川船を解体して段ボール箱をリサイクルすることになった。すると、段ボール箱に穴が空いているのを見たB男がすぐに、

B男「先生、この箱をください。」

T 「いいよ。何に使うの？」

B男「それはまだ秘密です。」

そう言ってメンバーと箱を運んで相談し始める。ガムテープや紙皿、割り箸等、自分たちで材料を選んで貼り付けている。頭を付き合わせながら相談する。



**相談しながらつくる トヨタ工場のメンバー達**

そして、段ボール箱の車が出来上がった。

B男「先生、出来ました。見てください。」

出来上がった箱を車に見立てて乗ってみせるB男であった。



**できました！**

車輪・・・紙皿

ウインカー，ミラー等・・・ガムテープ

ギア・・・割り箸

『年長秋まつり』当日（10月31日）は、テーブルにハンドルや設計図，紙皿車を乗せて売ったり，段ボール箱の車に年中組や年少組の子どもを乗せて楽しんでいた。



### (iii) 学部教員を交えた保育カンファレンスを通して

以上、学部教員と保育カンファレンスを行った一部分ではあるが、大いに次の保育を考える手立てを得ることができるものだった。このような保育カンファレンスを行うことは、教職員だけでは導き出すことのできない子どもの見取りや観察記録のとり方について、専門的な立場から示唆をいただくことができ日々保育を省察するよい機会にもなり、大変有効であった。日々継続して子どもを観察しているが、保育者の主観で子どもを理解している部分もある。しかしながら学部教員も子どもの遊ぶ姿を観察し、保育者と共に子ども理解をより深めていくことができた。また、日々の保育の中での様々なケースで、子どもへの働きかけやかかわり方がどうだったのかについて保育者が学部教員に質問することで、保育者が悩んでいることを少しでも解決し、次の保育の手立てを得ることができる場合もある。研究保育だけでなく、普段の保育の観察から意見交換できることは、次の保育改善への手立てを得られるものとなった。

### (3) 学びの連続性の検証

昨年度から、卒園児についても小学校での学習の様子を観察記録・分析している。今年度は3月に卒園したI男について、小学校での観察を3回、幼小合同カンファレンスを2回、大学の先生方を交えての検証を2回行った。

I男は年長児の頃は追求したいことに熱中する、目的に向かって黙々と試行錯誤しながらやり遂げるなどのよさがあると捉えていた。小学1年生となった今年度も、「5つの視点」での観察を継続していくこととした。小学校での授業を観察した後の幼小合同カンファレンスでは、I男には課題を解決したいという意欲が十分あり、教師の言葉かけや援助を支えとして、試行錯誤しながらも課題解決に取り組む姿が見られたことから、幼児期に培っている関心・意欲・自発性が、課題解決の意欲の土台になっているのではないかと分析した。

その後、大学の先生方を交えての検証で得られたことは次の2点である。  
○幼小の合同カンファレンスの機会をもてたこと自体が成果である。今後も、長

いスペインで観察・記録を蓄積することが大切である。

○小学校以降は授業のねらいが明確にあるので、様々な課題に対して興味をもちやってみようとする意欲をもつことが大切であり、その土台として幼児期の学びが重要である。

小学校以降の学びと幼児期の学びの連続性を検証していく第一歩として、今年度の幼小合同カンファレンスを足がかりに、今後も幼稚園と小学校の学びを理解し合う機会を設け、生涯の学びの土台となる幼児期の学びについて研究を深めていきたい。

#### 4 研究の成果

この研究を通じての成果として3点ある。

1点目は「子どもの学びが少しずつ見えてきた。」ということである。遊びを通しての学びは「見えない学び」と言われる。しかしながら、保育者自身が子どもをテ・ファリキの「5つの視点」で観察記録、分析することで、子どもの学びの姿が少しずつ可視化できるようになり、子どもを「何かを為そうとする存在」「有能な学び手」と捉え、子どもを肯定的に見ることができるようになってきた。そのことが保育者自身の保育のあり方を見直すきっかけとなり、学びの連続性・発展性を生み出す保育の改善に繋がっている。保育者の言葉にも、子どもの行動には意味があると捉え、保育者も子どものよさを引き出したり伸ばしたりするようなかかわり方が増えた、学部教員を交えたカンファレンスで、子どもの遊びの理解が深まり、保育者も日々の保育に自信がもてた、子どもの発達そのものについての理解や子どもへの援助の理解が深まった、などであり、この研究を通して子どもの理解を深め保育の充実を図っていくことができた。

2点目として、この研究を通して、「保育者の思い」による保育から「子どもの思いに寄り添った保育」へと変わってきたということである。子どもの関心・意欲・自発性は何にあるのか、それらはどのような環境構成や保育者の援助があればさらに高めていくことができるのか、という思いをもって保育に取り組むようになってきた。

3点目は、学びの連続性の検証が少しずつ蓄積できたということである。幼児教育に携わる立場から見ると、卒園児の小学校での継続観察、幼小合同カンファレンスを通して、幼児期の学びが小学校の学びに繋がっていることを知る機会を得ることができた。例えば、「関心・意欲」や「熱中」は小学校での学びを深め、発展させること、また、「困難に立ち向かう」ことは、学びをできた、できなかつたという「結果志向」ではなく、学びそれ自体を楽しむ「学び志向」に繋がっていくことを、卒園児の姿からほんのわずかではあるが垣間見ることができた。しかし、追跡卒園児の事例数は少ない。検証の客観性を高めるには、今後も追跡卒園児を増やし、事例数の蓄積を進めていくことが重要であると考えられる。

## 5 今後の課題

3か年に渡り、本研究を進めてきたが、研究を深めていけばいくほど、幼児教育の奥の深さを感じているところである。子どもの学びを可視化する手がかりが掴めた部分もあるが、小学校以降の学びを見通した幼児の学びの在り方を求め、今後、取り組むべき課題についてまとめた。

- 子どもを自ら何かを為そうとしている姿に見い出せる「5つの視点」から観察記録→カンファレンス（分析）→環境構成と教師のかかわりの改善・工夫という一連のサイクルを今後も継続し、子ども理解と保育の改善（すなわち学びの連続性・発展性）を図っていく。
- 抽出児を継続的に観察記録していることが他の幼児の子ども理解や保育の改善に生かされているが、今後も継続し、他の幼児についても事例を取り、様々な幼児についての事例の蓄積をさらに行っていく。
- 小学校以降の学びと幼児期の学びの連続性の検証のために、事例の蓄積と幼小合同カンファレンスを学部教員も交えて定期的に行い、幼小の職員間で相互の学びについての理解を深めていく。
- 「幼児期だからこそ十分に味わえる学び」を大切にしながら、幼小の円滑な接続が図れるように教育課程の見直しを進めていく。

以上、この3か年の研究を土台にしながら幼児期の学びについて、更に探求していきたい。

### 参考文献・資料

- ・大宮勇雄 他著 「子どもの心が見えてきた」ひとなる書房，2011
- ・大宮勇雄 著 「学びの物語の保育実践」ひとなる書房，2010
- ・大宮勇雄 著 「保育の質を高める」ひとなる書房，2006
- ・「現代と保育 69号～レッジョとテ・ファリキ」ひとなる書房
- ・「現代と保育 82号～小学校との接続を考える」ひとなる書房
- ・木下光二 著 「育ちと学びをつなげる 幼小連携  
—小学校教頭が幼稚園へとび込んだ2年間—」，2010
- ・小田豊 神長美津子 編著 「幼稚園教育要領の解説」ぎょうせい，2008
- ・全国国公立幼稚園長会 「幼稚園じほう」，2011・2012・2013
- ・文部科学省 「幼稚園教育要領」
- ・文部科学省 「幼稚園教育要領解説」
- ・全国幼児教育研究協会 編 「学びと発達の連続性—幼小接続の課題と展望」チャイルド本社，2006
- ・塩 美佐枝 編著 「幼児の遊びと学び—実践から読み取る知的発達の道筋—」チャイルド本社，2010